



科学ばかり 主義の克服

～ 未来の教育学のための人間研究 ～

(左司 和晃 著 . 明治図書 教育新書 22
¥ 700

「民俗学」と「科学」との出会い。それは、「解剖台の上のミシンと蝙蝠傘の突然の出会い」(ロートレアモン)ほどに、シュルなものであろうか。

著者が、この本で説こうとし、語っているのは、この「出会い」を未来の教育学のなかに位置づけたいということらしい。著者自身が、この本のはじめに、つぎの3つをあげている。

- ① 科学ばかり主義の一面性の克服
- ② 以前の世のコレジという思想の発見
- ③ その思想の今日化と教育方法化

認識史、というものの大筋を「即物的認識→俗信的認識→宗教的認識→哲學的認識→科学的認識」という形でのべてある。その、「科学以前」ものを完全に切り捨てる型での教育の危険性を警告している。たとえば「^学科のみごとさばかり教えられ過ぎると、とそすると科学を持たなかった人たちを軽く見たり、あるいは無知無能と見下したりする人間になるおそれなしとしない、ということだ。」さらに続けて「そのおそれを解消するためにも、人類の「認識史」といふばかりでかいところに立って、非科学や前科学の遺産をばっとはぶることなく、教育課程の中にくみ入れていかなければならぬ」…… (P72)

このことは、地下墓 39号に書いた、「常民の科学を授業に」と通ずるところがあるのではないだろうか。左司氏の言うところの非科学、前科学の遺産というのは、常民の科学でもあるのでは。では、どこにそれを見出すのが、それは、「祖先伝来の知恵のすくい取り」としてコトワガ、創作絵巻、「学級用き」と具体的方法をそぐっている (4)